発掘調査成果展　埋もれていた太宰府の歴史　12

宝満山の遺跡と暮らし

1　遺跡としての宝満山

宝満山は現在では身近に登山が楽しめる山として知られていますが、かつては山中で修験道が盛んであったことが知られ、近年の調査で竈門宮、竈門山寺、内山寺などの宗教に係る大規模な遺跡があることがわかりました。遺跡からは、山中とは思えないほど多くの輸入陶磁器が出土し、その他にも鎧や刀を製作した鍛冶の工房などが見つかっています。遺跡は南側が九州国立博物館東側の入口あたりから始まり、筑紫野市原、太宰府市内山、北谷、山頂の東斜面の筑紫野市本道寺、大石にまで及んでいます。古くは後期旧石器時代のナイフ形石器が出土し、新しくは近世から近代にかけての坊跡や石碑などが残されています。

2　初期の祭祀遺跡

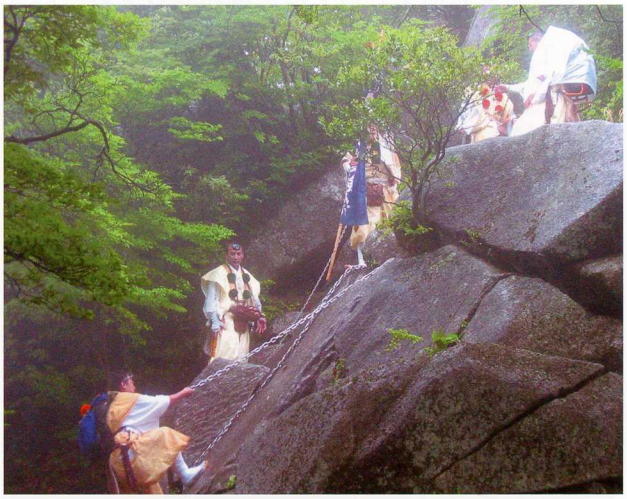
山頂や山中では土器を用いた祭祀の跡が数箇所で見つかっています。祭祀に使われた道具に滑石製の玉や鏡、銅銭、施釉陶器など、宗像の沖ノ島遺跡で発見された祭祀道具のセットに似ていることから、遣唐使などの航海安全や外交にかかわる祭祀が行われたと考えられています。これによりこの山が宗教に係わる性格を帯びることとなりました。

3　寺院に係る遺跡

記録によれば宝満山には竈門宮とともに平安時代初期に「竈門山寺」、後期に「大山寺」、鎌倉時代に「内山寺」、「有智山寺」があったことが知られます。この寺は歴史上同じ寺か否か判明していませんが、寺に係わると思われる礎石建物が竈門神社下宮、大字内山字本谷の妙見祠、字南谷のオタテと呼ばれる場所で見つかっています。発掘調

▲筑紫野市天山（南側）から見た宝満山

宝満山は標高 868m の頂で、北に仏頂山、三郡山、若杉山という山並みに連なっています。



▲復興された峰入り

宝満山での修験は明治維新の廃仏毀釈によりいったん途絶えましたが、昭和 57 年に行者の子孫などによって峰入りなどの行事が復興されました。写真は仏頂山側から鎖を伝って山頂にいたるところ。

▲山頂東崖の巨石

山頂祭祀はこの岩場の上で行われていました。現在はこの奥に竈門神社の上宮社殿が建てられています。

査によりその建物周辺は平安時代後期以降に尾根や谷が雛壇状に造成され、石垣や掘立柱建物で構成される寺社に奉仕した人々の生活空間（坊跡）と考えられる遺構が検出されました。

4　坊内の住人

坊にはさまざまな人々がいたと考えられ、原地区の丘陵から出土した経筒には肥前国松浦郡出身の僧観尊が山内の「大南」と言う場所の毘沙門堂に数ヶ月籠って法華経を書し功徳を積んだことが刻まれており、他所からの修行僧たちがこの坊内に出入りしていたことが知られます。博多綱主という貿易商の中には大山寺神人という肩書きを持つ者もあり、寺がおこなった貿易などに関係して商人など世俗の人々も出入りしていたことが想像できます。

また、内山の字大門や北谷の字小野では鎌倉時代の金属を加工した工房の跡が発見されています。工房では鉄や銅を溶かした炉の跡や廃材を捨てた穴、掘立柱建物や柵の跡が見つかり、鉄製の刀剣や鎧の部材、鏃、釘のほか鍛冶を行った際にでる鍛造剥片と呼ばれる金属片や鉄滓が出土しています。宝満山の刀鍛冶金剛兵衛もこれらの坊で生計をたてた鍛冶屋の中から生まれたものと思われます。

▲石垣で区画された坊跡

大字内山字南谷で検出された坊跡です。奥行 10m ほどの幅で雛壇状に造成され、段差の部位には一抱えほどの花崗岩で石垣が築かれています。段の間には石敷きのスロープが取り付けられる箇所も見られます。およそ 13 世紀から 14 世紀にかけての鎌倉時代の様相で、この面の下に 12 世紀後半の平安時代の石組みなどがあり、段階的に坊が整備された事が判明しました。ここでは金属生産にかかわる遺構は確認されていませんが、鉄滓や鉄釘などが出土する事から建設現場で間に合わせの鍛冶が行われたものと考えられます。

▲内山の谷で見つかった護摩炉跡

水が湧く谷部の調査で、四角い石組みの中から杭と端がこげた木切れが複数出土し、民俗例などから密教が行う護摩焚きの炉である可能性が考えられています。坊内ではこのような場で宗教的行為が行われていました。僧観尊が住んだ毘沙門堂の推定地はこの谷を挟んだ対岸にあたります。

▲金属工房の鍛冶に使用された炉跡

【写真上段】炉が見つかったときの真上から見たもの。
【写真下段】それを真半分に断ち割って横から見たもの。

典型的な円形の炉跡で同心円状に中心から茶色、青黒色、赤橙色に色調が分かれています。中心の茶色部分は炉が機能していたときには炉の底になっていたもので、通常は炉に詰まった炭や灰、鉄を加熱した時に金属の不純物が固まった滓がたまる場所です。ここにたまった滓は炉の形にあわせて底の丸い円盤状になるため、炉の掃除をしたときに取り出されたものは遺跡から出土すれば椀型滓と呼ばれています。青黒色の部位は炉の壁そのもので粘土を貼って成形したものが多く、燃え盛る炭が接するため還元化して土中の鉄分が青っぽく発色しています。その外側は逆に酸素を吸着するため強制的に土中の鉄分が酸化され赤く発色しています。

（太宰府市教育委員会文化財課　山村信榮）

平成 17 年 7 月 23 日発行　太宰府市教育委員会文化財課編集　〒818-0132 福岡県太宰府市国分 4-9-1　TEL 092-924-8533
※「逢知の栞」には、文化ふれあい館に集う人々が歴史や文化に触れ、様々な知的めぐり逢いがあるようにという願いが込められています。　インターネット情報　http://dazaifu.mma.co.jp